

【講演会記録】

# Play Me, I'm Yours Kunitachi 2018

## まちの縁側づくり

島崎 要子

### 目次

1. はじめに
2. Play Me, I'm Yours の構成
3. Play Me, I'm Yours の経過
4. アートプロジェクトとは
5. Play Me, I'm Yours とは
6. 評価・フィードバック
7. 国立市のプロフィール
8. まちの縁側と居場所
9. 助成から投資へ、イベントからプロジェクトへ



## 1. はじめに

本プロジェクトを主催した（公財）くにたち文化・スポーツ振興財団<sup>(1)</sup>は、国立市内で芸術小ホール・体育館・郷土文化館の三館を運営する指定管理団体ですが、2015年より館外で行うアート事業、くにたちアートビエンナーレを開催しています。Play Me, I'm Yours<sup>(2)</sup>の日本初開催は、くにたちアートビエンナーレ事務局が運営主体となり実施しました。

くにたちアートビエンナーレ<sup>(3)</sup>とは

<b>Anyone</b>	こどももおとなもお年寄りもアートに親しめるまち
<b>Anywhere</b>	アートを身近に感じ、世界につながるまち
<b>Anyhow</b>	アーティストとしてサポーターとしてファンとしてアートを楽しめるまち

をミッションに掲げ、長期的視野に立って芸術を育む良質の土壌を作り、「だれでも、どこでも、いかなるアプローチでもアートに親しめる」まちで、感性豊かな未来の人材を育て、グローバルな芸術の力を原動力にした新たなくにたちを発信するものです。

—くにたちアートビエンナーレ official website より—

Play Me, I'm Yours Kunitachi 2018<sup>(4)</sup>は、まさしくこのミッションに合致する「くにたちアートビエンナーレ関連事業」として、さらに国立音楽大学の誘致に始まった‘音楽のまち’国立市の「市制施行50周年記念事業」として実施に至りました。

実施の背景には、芸術・文化が社会に根づく仕組みについての検討がありました。それらが社会に根づくには、何世代も経て経過をみる長期的な視点に基づく取組みが必要です。まずは‘芸術を育む良質の土壌をつくる’すなわち‘観客（オーディエンス）を育む’ことこそ、芸術の次世代への継承にとって、遠回りにみえても近道であると思われれます。

国立市で毎年行なっている「市民意識調査」<sup>(5)</sup>によると、過去1年間に芸術を鑑賞しなかった人は、3年連続50%を超えて増加傾向にあり、鑑賞しなかったが芸術に関心がある人の割合は、3年連続50%に満たず減少傾向にあります。それは芸術に関心を持つ人が減っている、あるいは関心があっても鑑賞する人が減っているという可能性を示しています。

さらに、芸術を鑑賞した人のうち市内で鑑賞する人は2割に満たず、ほとんど国立市外で鑑賞しています。この傾向は過去10回の調査でも大きな変動がありません。それはひとつには、芸術に関心を持ち鑑賞する人々の層が固定化しているということであり、もうひとつには国立市内で行われる芸術事業が、顧客の関心から逸れていて、新たな視点の必要性を示唆していると言えます。公演や展示を行って観客を集めるという従来のスタイルとは異なる、Play Me, I'm Yoursのような、市民が主体の参加型アートプロジェクトの実施は、こうした状況に対するひとつの試みであり、くにたちアートビエンナーレの方向性の試金石となりました。

本稿では、このようなアートプロジェクトが、現実の社会に関与する例をいくつか挙げ、その後、国立市のまちのプロフィールについて述べ、Play Me, I'm Yoursの枠組みとどのようにつながり、どのように市民に受け入れられたかを中心に、統計や映像、アンケート結果を交えてご紹介します。

## 2. Play Me, I'm Yours の構成

—まちにつながりを生み出すアートプロジェクト



Play Me, I'm Yours は英国ブリストルに拠点を置く美術家、Luke Jerram<sup>(6)</sup>（以下ルーク・ジェラムと表記）が起案し、2008年英国バーミンガムから始まり、南米・北米・欧州・中国・豪州など世界の60都市で行われているアートプロジェクトです。間違われやすいのですが、音楽イベントではありません。



写真：RIKA OZAWA

プロジェクトのコンテンツは大変シンプルです。

- ① 不要になったピアノを集める
- ② 地域のアーティストが装飾する
- ③ 公共の場所に設置する
- ④ 自由に弾いてもらう
- ⑤ ウェブサイトに投稿して世界でシェアする

開催前にこのような内容の告知を見た市民のなかには、これのどこが面白いのだろうと思った人もいました。しかし蓋をあければ国立市内外から二週間で約 60,000 人の人々がピアノを訪れ、まちを歩き、アンケートや SNS に多くのメッセージを残してくれました。プロジェクトの開催報告<sup>(7)</sup>については、くにたちアートビエンナーレの公式サイトからご覧になれます。

開催にあたり、ルーク・ジェラムに開催希望を申し出て、契約を結びプロジェクトの使用料を支払うと、運営に関わる様々なガイダンスや各種のサポートを受けられますが、開催費用は主催者が全部負担します。ルーク・ジェラムが開催都市を決めて巡回しているわけではありません。プロジェクト実施の条件に合えば誰でも開催できますが、作品のコンセプトを良く理解することはもちろん、公共の場所にピアノを設置するため、設置場所の許認可の取得、地域や設置場所への事業説明や苦情処理、ピアノの調達、調律や保管、運搬設置業者への協力依頼、装飾アーティストの決定、作業場所の確保や工程管理、ボランティアの募集・管理をはじめ、英国のプロジェクトマネジャーとの連絡調整など、様々な組織や行政、地域との交渉が必要です。

しかし、このプロジェクトほど、その煩雑さに勝る楽しさを街じゅうで共有する事業はなかなかありません。次項ではそのプロセスを簡単にご紹介します。

### 3. Play Me, I'm Yours の経過

—プロセスの中でふだん出会うことのない人がつながる

2016	12月	14日	Luke Jerram Ltd. と契約締結
2017	4月		不要になったピアノの寄贈募集の告知
	5月		株式会社と と契約締結
	6月		公式ウェブサイト公開
	7月		ピアノの決定 装飾アーティストの決定
	8月		公式タンブラー/SNSの公開
	9月	1日	ピアノクルー募集の告知 ピアノの引取 ピアノ設置場所の決定
	10月	4日	装飾アーティスト・ガイダンス
		13-14日	ピアノクルー・ガイダンス
	11月		Luke Jerram Ltd. ピアノデザイン案承認 国立音楽大学別科調律専修による学外授業
		16日	第1回調律（塗装前） ピアノ塗装下地の調整・研磨
	12月		ピアノ装飾期間 開始
2018	1月	25日	ピアノ装飾ワークショップ
		8・28日	第1回公開制作
		27日	第2回公開制作
	2月	4日	ピアノ装飾ワークショップ
		10日	第2回調律（キックオフ前） 指定のステッカー等附属部品の取付
	3月		関係者内覧会
		7日	装飾ピアノ引取希望者内覧会
		8・9日	英国よりプロジェクトマネージャー来日
		12日	キックオフイベント
		16日	ピアノ設置
		17日	期間中イベント 9回実施
			第3回調律（期間中）
			クローゼンイベント
		31日	ピアノ撤出
	4月	1日	



ルーク・ジェラムに打診してから、2018年の3月の開催まで1年半を準備にかけました。関係各所にプロジェクトが日本で初めての開催であることを説明した時、思いもかけず最初の壁にぶつかりました。協力を仰ぐ民間向けには追い風となり、理解を求める行政向けには逆風となったのです。それはリスク

マネジメントの観点の相違から、民間は誰もやらないことをめざすことに意義をみつけ、行政は誰もやらなかったことには、何か不都合な理由があるのではないかと考えるからです。

本プロジェクトのもうひとつの試みは、財団とプロフェッショナルな民間チームとがともに企画運営に携わることでした。基本言語の違う集団の壁にぶつかりながら漕ぎ出しましたが、マネジメントを財団が務め、プロジェクトに賛同してくれた個人、団体でプロモーションやテクニカル面での専門チームを構成して、単なるサポートではなく共同運営者としての関わりを求めて進めた結果、予想を超える成果が得られました。

すなわち専門性をもつ者が自分ごととして関わることで生まれる、ハイクオリティでスピード感のある対応のみならず、開催までのプロセスの中で、商業施設、企業、商店、商店街組合、市役所、調律師、ピアノ運搬会社、大学、アーティスト、建築家、ピアノ寄贈者、ボランティア、マスコミ媒体、ピアノを訪れる市民、様々なジャンルの音楽家など日頃出会うことのない人々がつながって、期間中はファミリーのような一体感が生まれ、閉幕後につながる新しいネットワークができました。開幕前に、既に運営側が人と人、人とまちのつながりを生むこのプロジェクトの骨子を体験したことになります。

その理由は、Play Me, I'm Yours が、ピアノを置くだけのイベントではなく、

- ① しっかりしたフレームをもつ**アートプロジェクト**だったこと。
- ② 財団だけでなく、**地域の民間専門集団や企業と協働**し、運営したこと。
- ③ **市民が主役**ということがみえやすい作品だったこと。
- ④ **国や年齢を越えて関わる**ことが可能な作品だったこと。

ではないかと思います。

次項では、コミュニティにダイナミズムを生み出すアートプロジェクトとはどういうものか、続いて Play Me, I'm Yours の枠組みについて触れます。

#### 4. アートプロジェクトとは

—対話や参加，協働のプロセスを通じて，ソーシャル・チェンジをもたらす

アートプロジェクトは，Socially Engaged Art<sup>(8)</sup>とか Social Practice などと呼ばれるジャンルに属するものです（以下ソーシャリー・エンゲージド・アートと表記）。近年のアートの潮流として注目されているソーシャリー・エンゲージド・アートとは，美術館というホワイトキューブの枠にとどまらず現実社会に積極的に関わり，人々との対話や参加，協働のプロセスを通じて，何らかの社会変革（ソーシャル・チェンジ）をもたらそうとするアーティストの活動の総称です。めざしているものは，日常生活における小さな意識の変化から社会制度の転換まで幅広く多様です。なかには，これがアートなのかと思えるようなスタイルもあります。

昨今では Engagement ‘関係性を築く’ から Commitment ‘深く関わる’，さらには Management ‘運営していく’ という活動も多くみられます。今や，このジャンルのアートは，問いを社会に投げかけるだけでなく，実際に社会の問題を解決し，結果にコミットしはじめています。

近年，地方自治体も国も「アートによる●●」を掲げる傾向にあります，この場合アートに美学的な美を求め，それが人々にどんな影響を与えるかという視点で解釈したのでは，現代アートの枠組みには収まりません。アートに社会を変えるほどの力があるとするれば，それはアートの視点でしょう。つまり，アートとは，自分が漫然と見ていて，世の中の当たり前になっていることを疑うことから始まります。アーティストは創作の過程で日常に，新たな視座を見出しますが，それがクリエイティビティというものです。そういう意味ではクリエイティビティとはアーティストだけのものではなく，ビジネスでも研究でも求められるスタンダードではないでしょうか。

二つの事例をみてみましょう。一方は日常における小さな意識の変化をねらうものであり，もう一方は社会を大きく変えていくものです。

● アイ ウェイウェイ  
艾未未：《安全な通行》・《Reframe》<sup>(9)</sup>



これはヨコハマトリエンナーレ2017<sup>(10)</sup>のメイン会場に展示された作品です。一見、横浜美術館のファサードが鮮やかに彩られたかのように見えますが、近くに寄って見た時、その正体に少なからぬ衝撃を受けます。エントランスの柱を覆っているのは、中東や北アフリカから地中海を渡り、レスボス島に漂着した難民たちが実際に着用していた、およそ800着のライフジャケットです。作品タイトルは《安全な通行》。生死を賭けた人々が着用していたライフジャケットの群れは、《安全な通行》というタイトルのもと、トリエンナーレのメイン会場である美術館への「避けては通れない」入口となっています。外壁に並ぶ《Reframe》は、窓枠に見立てた14艇の救命ボートです。タイトルにあるように、人命を救うための救命ボートで新たな枠組みをつくることを意味しています。

ニュースで知りながらも、日本ではなかなか実感できない難民問題の現実性が強く突きつけられる作品だと言えます。

● リック ロウ プロジェクトロウ ハウス  
Rick Lowe：《Project Row Houses》

プロジェクト・ロウ・ハウス<sup>(11)</sup>は、アーティスト、Rick Lowe（以下リック・ロウと表記）が中心となって25年前にヒューストンで始めたコミュニティ再生プロジェクトです。

1993年、アフリカ系アメリカ人が主に住むテキサス州ヒューストンの貧し



い地区「第3区」で、開発計画によって取り壊されようとしていたショットガンハウス22戸を、リック・ロウとアーティストグループが買い取って修復し、ギャラリー、アーティスト・イン・レジデンス、若い未婚の母のための一時的住居などに変えていきました。

ショットガンハウスとは、玄関からショットガンを撃つと、弾丸が部屋のドアを通して住宅を貫通し、裏口から外に飛び出すという意味で、間口が3mほどでいくつかの部屋が廊下もなく一直線に並ぶ家のことです。1920年代までは南部で一般的でしたが、20世紀中ごろには貧困層のシンボルとなりました。



写真：SEAリサーチラボ websiteより

開発に伴うジェントリフィケーションの問題は、治安が良くなり景観もよくなる一方、家賃の高騰や高級店の参入による物価上昇などでコミュニティが崩壊し、元の住民が行かざるをえない点が指摘されます。アートを触媒として、住民を追い出さずに地域の歴史と文化を継承しながら住民のニーズに応え、エンパワメントを目指すこのプロジェクトは、提供するサービスや区域をさらに広げ、地域の持続的発展につながるソーシャリー・エンゲージド・アートのモデルとなっています。

それでは、Play Me, I'm Yoursはどういう文脈でつくられているのでしょうか。

## 5. Play Me, I'm Yours とは

—ピアノがコミュニケーションの触媒

ルーク・ジェラムにインタビューした記事を公式サイト<sup>(12)</sup>に上げました。ここでは Founder 自身の言葉を抜粋し、Play Me, I'm Yours の枠組みを紹介します。



写真：RIKA OZAWA

● “Invisible Communities”：同じ場を共有しつつもまるで存在しないかのように振る舞う「見えないコミュニティ」

「Play Me, I'm Yours の着想は、週末に洗濯をしに地元のコインランドリーに行くと、いつも同じ人たちに会うけれど、だれもお互い話をしないというところから生まれました。

朝、バスや電車を待つ人々もやはりお互い会話を交わすことはない。こんな見えないコミュニティの集まりが街じゅうに存在しているのだと気づきました。

例えばそんな場所にピアノを置いたら、会話が生まれるきっかけをつくる触媒のような働きをするのではと思いました。人々をつなぎ、一人ひとりの創造力を生む真っ白なキャンバスのような働きをするのではないかと…。」

● “social barrier”：年齢，文化，階級，社会的地位…見えない障壁を破る

「見えないコミュニティの陰には、世代や文化，社会的立場の違いなどのそうしたソーシャルバリアの存在がありますが、共に演奏し、会話をするうちに、そのバリアが崩れてくる。例えば、クラシック音楽の好きなお年寄りが10代の若者に曲の弾き方を教える，ホームレスの男性の見事な演奏に乗ってビジネスマンが踊り出すなど，バリアが崩れるシーンを色々と見てきました。」

● “democratize the arts”：アートを誰でも平等にアクセスできるものにする

「従来のギャラリーや美術館中心の展示には、そのシステムに馴染めない人たちがいる点や、ハイライト的な展示が国や都市の中心部に集中してしまう問題があります。それに対して公共の場でのアートプロジェクトには、そうした枠外の人たちを含む広い層の人に直接作品を届けることができ、参加型の形式をとることにより、人と人，コミュニティとコミュニティをつなぐこともできます。」



左写真：RIKA OZAWA

廃棄寸前だったピアノが装飾を施されてある日突然通りに現れる。「Play Me, さあ、私を弾いて!」と日頃ピアノに触れない人々をも誘い、公共の場所をどのように使うべきかという問いを投げかける…。ピアノがいつものまちに非日常を創り出し、行きかう人が一緒に弾いたり、歌ったり、踊ったりする機

会を提供し、演奏する人もしない人も写真や動画を共通のウェブに投稿し、世界中でシェアする「誰もが表現者となれる」プロジェクトが、実際に国立市で行われた様子を紹介した映像が Play Me, I'm Yours の公式サイトにありますのでご覧ください。 <https://youtu.be/3KnkiEk0GFY>

## 6. 評価・フィードバック

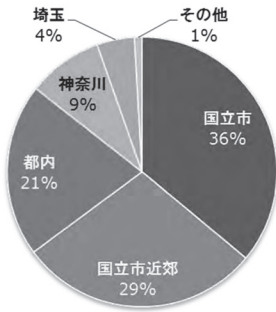
### 一見知らぬ人とのコミュニケーション

桜の開花も味方して二週間で約 60,000 人、予想をはるかに上回る動員数から人口 76,000 人ほどの国立市に、近隣市、都内、他県、外国人観光客まで老若男女、多くの人が訪れたことがうかがわれます。市内に長期間、民泊して、国立をめざしてやってきたオランダのピアニストや、日本を旅行中、わざわざ国立に立ち寄った英国のピアニストもいました。

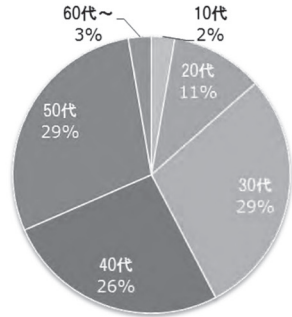
当初、友人や家族と予め準備して演奏に来る人が多いと予想していましたが、仲間だけで演奏する人ばかりではありませんでした。ピアノという楽器の特性もあり、独りでピアノを弾きに来る人はとても多く、そこへ打楽器で加わったり、他の楽器を持っている人を誘ったり ボーカルが参入したり・・・と、にわかセッションが始まり、それを楽しむシーンをこの街で見るとは開幕前には想像もしませんでした。SNS 上には「まるで外国のようだ…」というコメントも散見し、演奏者や観客の国際色も相まって、普段は目にしない光景が非日常を作り出していました。SNS やウェブには、たくさんの人が動画や写真、まとまったコメントを上げています。

最終日には誰でも自由に書けるメッセージウォールが、イラストやメッセージで埋まりました。

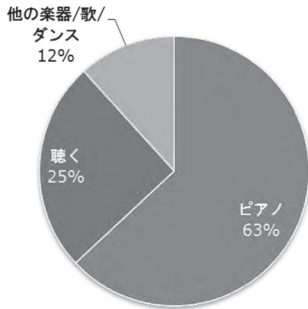
実施したアンケート<sup>(13)</sup>にも多くの方からの感想や意見が寄せられ、それらの結果は、くにたちアートビエンナーレのウェブサイトから閲覧できます。



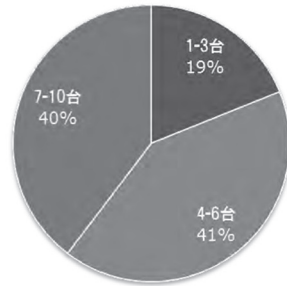
【お住まいの地域】



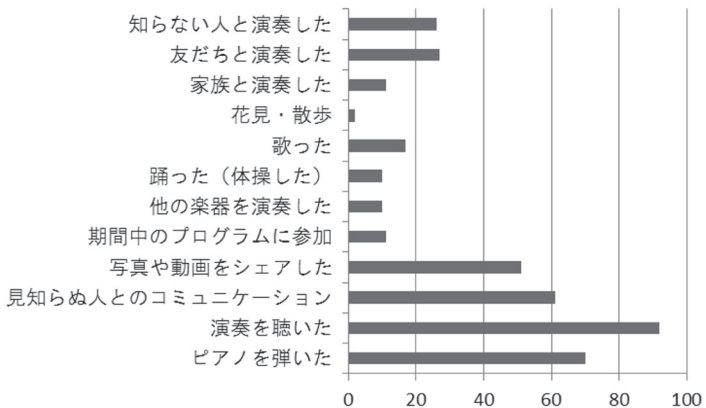
【年代】



【参加形態】



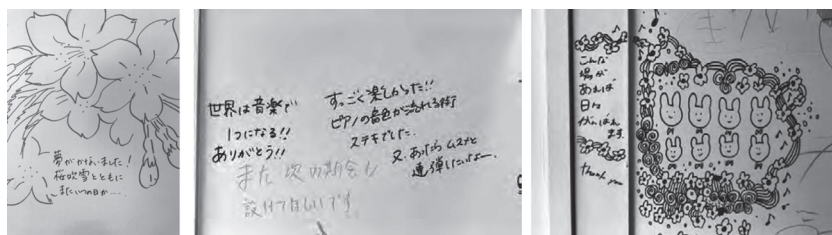
【訪れたピアノの数】



【体験したこと】

Youtube	投稿数	2,077
Instagram	投稿数	545
公式サイト	投稿数	241
タンブラー	閲覧数	18,513 (2018年3月)
Facebook	フォロワー数	561
Facebook	いいね!	512
アンケート	回答数(紙/ウェブ)	111 (2018年3月29日-4月9日)

※その他、Twitterでの拡散多数。



閉幕後も寄贈者とアーティストがピアノのストーリーを本にしたり、アーティストとピアノを引き取った人がつながり、ホームコンサートを始めたり、設置場所提供者の商店街がインスパイアされた企画を始めたり、学生が社会調査を始めたり、国立市に引っ越してきた人もいたのです。

- ・街を歩いていて、音楽が聴こえるのは幸せな気持ちになれる
- ・樂園のような光景は幸せな記憶とともに、最高の宝物として心に残り続ける
- ・老若男女がピアノに触れ、いつの間にか会話が生まれている
- ・市民であることに誇りを感じる
- ・見知らぬ人が友人になる
- ・長い間この町に住んでいて、これほど市民でいてよかったと思ったことはない。
- ・まちに出かけるのがとても楽しみで積極的に外出していた (アンケートより抜粋)

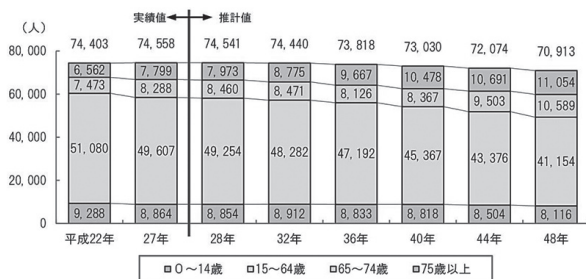
さて、いかに優れたアートプロジェクトも、地域性を読み間違えると空騒ぎに終わってしまうことがあります。プロジェクトの実施には必ず、このまちで行う妥当性を検討するフレームワークを検討しますが、何をおいても地域についてのデータを調べることにになります。

人口構成，世帯構成，一人当たり納税額，若年層の非正規雇用率，相対的貧困率，学校外教育の費用支出，市民意識調査等の地域特性や統計資料を読んで，まちの姿を検討します。

## 7. 国立市のプロフィール

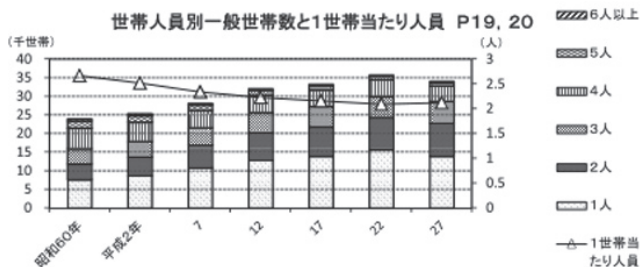
— 《一人旅の旅人》が暮らすまち

図表 2.3 将来人口の推計（国立市）



資料：国立市

人口統計<sup>(14)</sup>は大きな変動が少ない資料の一つです。2015年以降，減少傾向にあります，2018年8月1日現在，人口76,167人，65才以上の人口が17,303人で4.4人に1人が65才以上の高齢者となっています。高齢者の割合よりも問題なのは，20年後には生産年齢人口（15－64才）の割合が58%となり，6割を割り込むという予測であり，この数字は戦後まもなくの数字よりも2%も低くなります。若年層の流入と定着を生む仕組みが必要かもしれません。



さらに世帯数と世帯人員構成については、2015年の国勢調査の結果によれば、34,019世帯のうち最多13,906世帯が一人世帯で4割以上を占めています。大学まちゆえに、学生の一人暮らしも含まれますが、学生は住民票を移さず居住実態が反映されないことが多いようです。若年層の流入と流出は、ほぼ横ばいまたは微減で、若年層の定着率は低いのが現状です。2018年8月1日現在、世帯人員数平均はおよそ2.0人となっています。

一人世帯とはいわば、同伴者のいない旅人のような存在ではないでしょうか。定住しない若年層もまた、このまちを通り過ぎる旅人の一人でしょう。「市民意識調査」<sup>(45)</sup>によれば何らかのコミュニティに所属している市民も1/4ほどで、いわゆる都市型の生活形態がうかがわれます。

このようなくにたちのまちを、「一人旅の旅人が暮らすまち」になぞらえてみると、だれにとっても居心地のよい場所の指標が見えてきます。

- ① 老年人口の増加 ⇒ 所属コミュニティを持たない人々
- ② 一人世帯の増加 ⇒ 同伴者のいない旅人
- ③ 若年層の微減 ⇒ 来ては去っていく若者



ゆるい関係性  
偶発的なコミュニケーション

例えば一人旅で一番所在ない思いをするのは、食事の時…。朝や昼はともかく、夕食をまちなかできちんとするのは億劫なこともあります。そんな旅人にも居心地がいい場所があります。

ヨーロッパの広場は、車の通行が禁止されていて、人が溜まれるように、1階が商業施設やカフェになっている建物に囲まれています。昼間は野菜や雑貨を売るワゴンが並び、夕方になると大道芸人やストリートミュージシャン、花売りなどがやってきて、食器を運ぶ音、おしゃべり、音楽など雑多な音に包まれ、自分が一人でいることが浮き立たない空間があります。みともなくパフォーマンスに目をやり、はた迷惑なピエロに、隣席の人とその戸惑いを共有して微笑を交わしたりもします。その居心地の良さはどんな要素で成り立っているのかというと





ここには束縛されないゆるい関係性、偶発的なコミュニケーションが生まれる可能性があり、それは Play Me, I'm Yours が生み出すまちの空気感に合致すると思われます。このプロジェクトがまちに受容される要素です。



## 8. まちの縁側と居場所

— 《ここに行けば何かに出会える場所》

---

突然現れた非日常から日常をみなおすこと

音楽の力を借り、人々がコミュニケーションをとる際の壁を取り去ること

---

期間中に置かれたピアノは上記の働きをみごとに果たし、そこから何かを創造できるきっかけを得て、実際に関わった人々や市民の中にいろいろな動きがありました。音楽というマジックがあるとはいえ、デジタル時代に人々が、やすやすと知らない人と会話を始めるアナログな光景は、未来に希望さえ見た



写真：RIKA OZAWA

気がしますが、すべての試みは、まずは人と人との対話から始まるのだと当たり前のことを改めて感じました。

ピアノの置いてある所が「まちの縁側」となり、笑顔と話の花が咲きユートピアのような景色でした。友達と会っていてもスマホの画面から離れられない現代人ですが、老人も若者も皆、世代を超えて会話を交わしたり、楽しさを表現するのに小声で歌ったり、体を揺らして踊ったりする光景は「平和」という単語を彷彿とさせます。まちづくりの視点に「広場」のイメージを置いていましたが、くにたちのサイズ感からいえば、「縁側」と呼ぶのに相応しく、本プロジェクトがまさしくまちの縁側を実現していた感があります。

これからしばらくは、日本は長期にわたり人口減少と高齢化、長寿化、一人世帯化が進んでいくので、まちの中に「ここに行けば誰かに会える」という、人間関係をフィックスしたのではなく、「ここに行けば何かに出会える」場所が、誰にとっても豊かで心地よい居場所になるのかもしれない。

期間中は、日頃、日用品の買物くらいしか出歩かない一人世帯の高齢者も、少くも足が痛くても、家の中にいるとそわそわと落ち着かなくて、結局毎日のようにまちを歩き、生の音楽とそのわくわくする臨場感を楽しんだという声を多く聴きました。

## 9. 助成から投資へ、イベントからプロジェクトへ

### — 《アートインフラ》の事業化の課題

国立市は人口も少なく高齢者が多いので税収も少ない。ところが一人当たりの納税額は、高額納税者の多い武蔵野市に次ぐ順位です。従って経済格差も大きく、それによる学習格差、こどもの貧困などが大きな問題になっています。人口減少と高齢化、若年層の貧困化はまさに負のスパイラルで、ここに芸術の入る余地があるのかという意見もありますが、貧困が削る時の一番の支出である芸術こそ、公的機関が支えていくべきものかもしれません。

このような事情を踏まえ、芸術・文化の事業を担う財団としては、それを見据えたビジョンをもつ必要があります、「芸術・文化が社会に根づく仕組み」のひとつとして、イベントからプロジェクトへと転換し事業化するためには、助成ではなくアートインフラへの思い切った投資が課題となることは容易に推察できます。

さて、文化投資については、加藤種男氏<sup>16)</sup>の論考を引き、公的施設の課題について述べ終論に入ります。

投資とは通常、リターンを想定して資金を投入するもので

- ①リターンは投資者に返ってくる
- ②リターンはふつうお金で返ってくる
- ③リターンは予め返ってくる時期が予測できる　のが原則です。

しかし、これらは文化投資には一切当てはまらず、リターンは投資者に返ってくるのではなく社会が受け取って意味があり、お金で戻ってくるのではなく、新しい視点の開発や人材が育つことだったりします。さらにいつリターンが返ってくるのか。10年、50年、100年後かもしれない。文化投資とは、形のあるものに還元できないリターンに期待して未来へ投資することです。

そのためには社会とアートをつなぐインフラを、未来への投資としてしっかり事業化していくことが必須だと思われます。

ソーシャルワークの文脈なのか、ソーシャリー・エンゲージド・アートの文脈なのかという問題より、社会を良い方向に変えるという点で、既に海外の事例もあり、いくつかの民間団体が試み始めていますが、公的施設こそが民間の専門性と協働し、長期的な展望をもって取り組むべき今後の課題ではないかという提言にて結びとします。

※ 本稿中の写真はクレジットの入っているもの以外は著者撮影によるものである。

## 注

- (1) 市民芸術小ホール, 市民総合体育館, 郷土文化館の三館を運営し, 国立市の文化・スポーツ事業を企画実施している国立市の公益財団法人。 <http://www.kuzaidan.com/>
- (2) 英国の美術家ルーク・ジェラムによるアートプロジェクト。2008年バーミンガムで始めて10年, 世界の60都市で開催し1900台のピアノを設置, 延べ1,000万人以上の人々が楽しんだ。 <http://www.streetpianos.com/>
- (3) (公財)くにたち文化・スポーツ振興財団が全国公募による野外彫刻のコンペティションを主軸に置くことで, 2015年より行っているアート事業。2018年の第2回では, 関連事業としてPlay Me, I'm Yoursの開催を試みている。 <http://kunitachibiennale.jp>
- (4) 2018年3月16日-3月31日, Play Me, I'm Yoursを日本で初めて国立市が開催。international project managerのSally Reayがロンチに立ち会う。都庁生活文化局や一橋大学国際課の協力を得て, 海外からの観光客向けの発信や留学生への告知を行い一定の成果を得た。公式サイトは日英表記。 <http://streetpianos.com/tokyo2018/>
- (5) 市民の日常的な意識を把握するとともに, 行政評価システムにおける32の施策の指標の達成度等を把握するため, 住民基本台帳に基づく単純無作為抽出した国立市在住の満18歳以上の男女3,000人に送付して回答を集める。 <http://www.city.kunitachi.tokyo.jp>
- (6) 英国ブリストルに拠点を置く美術家。森美術館でも展示されたウィルスをか

ラスで表現した Glass microbiology のような彫刻作品の他、坂道にウォータースライダーを出現させた Park and Ride や夢を形づくるため気球から夜明け前に音楽を流す sky orchestra、また世界を巡回するプロジェクトでは、NASA のデータに基づく直径7mの月のインスタレーション Museum of the Moon を手がけている。<https://www.lukejerram.com/>

- (7) 開催概要, キックオフ, クロージング, 経過, 収支報告などをまとめたもの。<http://kunitachibiennale.jp/kaisai0605/>
- (8) 普遍的定義はまだ定まっていない。パブロ・エルゲラ著『ソーシャリー・エンゲージド・アート入門』第1章「定義」では美術史上の系譜をアヴァンギャルドから始まるとしている。《カテゴリーとしてのソーシャリー・エンゲージド・アートは、いまだ概念構築の途上にある。しかしながら、多くの解説では、その系譜はアヴァンギャルドに端を発し、ポスト・ミニマリズムの出現で著しく拡大したとされている。1960年代の社会運動は、アートと社会を結びつけ、プロセスやサイト・スペシフィティを重視するパフォーマンス・アートやインスタレーション・アートを生み、それらすべてが今日のソーシャリー・エンゲージド・アートに影響を与えている。過去数十年、社会的相互作用に基づくアートは、関係性の美学 relational aesthetics, あるいはコミュニティ・アート, コラボレイティブ(協働型)アート, パーティシパトリー(参加型)アート, ダイアロジック(対話型)アート, パブリック・アートなど多くの名称で特徴づけられてきた…最近の出版物やシンポジウム, 展覧会では、「ソーシャル・プラクティス」が目立つようになり、ソーシャリー・エンゲージド・アートを指す用語としてもっとも広く使われている。》
- (9) 難民問題を扱ったヨコハマトリエンナーレの作品について, 美術手帖 web 版の解説を参考。<https://bijutsutecho.com/magazine/news/headline/5993>  
人類はひとつだと述べるアイ・ウェイウェイの artist message は <https://youtu.be/bE5QLh85aVE>
- (10) 従来の社会の枠組みや価値観が大きく揺らぎつつある今日, ヨコハマトリエンナーレ 2017 は、「島と星座とガラパゴス」というタイトルのもと, 世界の「接続性」と「孤立」の状況について, アートを通じて様々な角度から考察することをコンセプトに企画された。難民問題を直視したアイ・ウェイウェイの大型作品他, オラファー・エリアソンのグリーンライトを難民とともに組み立てるワークショップなど, 分断する世界への警鐘や連帯を表現するものも目立った。we-ness を述べているエリアソンの artist message は <https://youtu.be/cPJG83bSpjs>

- (11) 解説と写真のソースはSEA リサーチラボ。 <http://searesearchlab.org/case/prh-2.html>  
2009年設立の特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センターの運営するウェブサイト。主要なメンバーは秋葉美知子 工藤安代 清水裕子。同センターは、世界的な潮流となっているソーシャリー・エンゲージド・アートに注目し、2013年にスタッフメンバーを中心にSEA研究会を創設。調査研究、展覧会・イベント開催、出版活動を行っている。
- (12) 公式タンブラーに、2018年3月、キックオフ直前にインタビューした結果を記事にまとめたものを掲載。 <http://streetpianoskunitachi.tokyo/post/172290700214/lukeinterview>
- (13) 実施期間2018年3月29日ー4月9日。回答数111。ウェブと紙とでアンケートを実施。結果はウェブに公開。 <http://kunitachibiennale.jp/kaisai0605/>
- (14) 「統計くにたち」は、国勢調査をはじめ、国が行う統計調査の結果や、他の官公庁や民間会社が持つ国立市に関する資料を集め、人口、財政、福祉や教育など市の姿をできる限り具体的に把握できるように編集している。
- (15) 注5に同じ。
- (16) 加藤種男（公益社団法人企業メセナ協議会 専務理事） ネット TAM オリンピック・パラリンピック (1) 文化投資のビジョンと戦略より。 ネット TAM は、トヨタが企業メセナ協議会と連携して運営する、アートマネジメントに関する総合情報サイト。